第十八卷　第三號　五〇六

雜纂

蓮如とその時代の民衆

日置彌三郎

一

室町時代といへば、「咲きみちて花より外の色もなき」足利義政等の榮華と、飢餓に迫られて生への涙ぐましい奮鬪努力を續けた一般民衆とを思ひ浮べる。應仁の亂直前の時世を嘆じて、碧山日錄の著者が、

凶年歉歲、天子減其膳、以與兆民同其憂、公卿大夫士、復有降差之減、(中略)飽食暖衣、爛醉狂歌、而不知凍餒出於我、只以逸樂爲意何也。(長祿四年三月十六日の條)

と慷慨してゐるところによくその時代相を見ることが出來る。然しかゝる中にも、彼の土民を中心としての各種の一揆運動、或は足輕の活動等よりして、下層階級に力強い自由の氣分が漲り、一般民衆の擡頭を見るに至つたとするの論がある。けれどもそれには猶ほ考ふべきものがある。今こゝに戰亂の血煙を潛り、他宗の强襲と鬪ひながら他力本願を强調し、一切衆生成佛の高い理想を掲げてその教義を效果的に布教し、他の諸宗を壓倒するの概あらしめた本願寺第八世蓮如を再檢討し、またその信徒たる民衆の生活相の一方面を見んとするのが此の拙い小論の目的である。

二

廣く佛教史を概觀すれば、印度以來幾千年、最初は超世間的態度を以て興つた佛教が、時代が下れば下る程、世俗に接近し、社會に同化するの態度にて漸次發展し來つたことは掩ふべからざる事實である。鎌倉時代の新興

佛教は多く前代佛教の貴族的にして個人生活を基とせるに反し、一般民衆を考へ、宗教的の團體生活を營むことが行はれてゐる。然しそれらの後繼者と教線の擴張、布教の程度は貧弱なるものであつた。僧侶の墮落も著しく、それに就いては既に早く一言芳談に「昔の上人は一期道心の有無を沙汰しき。次世の上人は法文を談ず。當世の上人は合戰物語云々」と評されてゐるが、それは時代の推移と共に愈〻激しくなつたのである。夢窓國師の「いとふとて染むる衣の色みれば世を渡る人の飾なりけり」との歌も、僧侶社會に入ることは、世を遁れるのではなくして、愈〻塵巷に交はり、世俗的勢力を得ることであり、卽ち佛教の墮落をいふものである。かゝる佛教の墮落を見る時、こゝに異色ある僧侶の一人なる蓮如の布教とその信徒との關係は殊に興味ある問題となつて來る。

三

蓮如の人を教ふる態度方法の如何に平民的にして、諸人をして己に接近せしむるに努力せしかは彼に關する諸書に見えてゐる。蓮如上人一期記、實悟記に、蓮如が先々代巧如、先代存如の時、形議稱名にも形式が嚴しく、また信徒に接するにも上壇に坐つてあつたのをとりのけ田舍の人々も、常住出入の衆に對しても、總べて同樣に扱ひ、諸人を傍近くに置いて和讃の心などを聽かせたがこれは嘗てなかつたことであると蓮如のいうたを記してゐるに見ても明かである。それは實悟記に見える蓮如が昔より下輩の者には使用を許されなかつた御一門の梡なるものを、不用のものとして悉く打割つたとの物語にも窺ふことが出來る。更に山科本願寺に於て、宗祖親鸞の命日であり、且つ自分が六歳の時母と生別したその悲しき日でもある廿八日の前夜卽ち逮夜に、平家琵琶を語らしめて參詣の人々に聞かせたことも、こゝに注意さるべきであらう。實悟の山科御坊事並其時代事なるものゝ中に此の事を記して「御坊中町まで用心の事かたく被申付候」といひ、寺內町の住民がこれに集り、ために留守中の火の用心をいへる如き、如何に民衆が群集したかゝ窺はれて興味深い。然しかく餘りに布教に熱心なる態度は時に手段を選ばず、彼が常に人に物を與へ、或は酒等を

飲ませて人を近付かしめし如き態度は、他宗より誤解を招くに至らしめたものである。（蓮如上人一期記）

次にその道德生活に關していふものを見るに、先づ實悟記に、

ヨクホドコスベシ〳〵、ヨクタモツベシ〳〵トハ經文也、常ニ蓮如ノ仰事アリシ文也、ホドコスベシトハ、人ヲアハレミ、人ニ出スベキ也、ヨクタモテトハ志ニ人ノマヰラスルヲバ、難有ト思ヒテ取ベキ也ト常ニ仰事也。

とある如く、憐愍と報恩とを以て相互扶助、共存共榮の實を擧けしめんとする。なほその根柢には信の存すべきをいひ、「信ヲ得バ同行ニモアラソウ物ヲモイハズ心モ和グベキナリ」（蓮如上人御法談）と述べてその同朋團を信によつて結び付けんとした。

更に進んで國にあらば守護、在々所々にあらば探代目代の掟に背かず、一定の年貢運上課役等は具に沙汰し、謀叛・盜賊・勾引人の與黨になるを禁じ、或は寺社本所領の押領を禁じ、以て下剋上の風を矯め、靜謐の世たらしめんとするのにある。而してその王法を重んずる所以のものは、眞宗教要鈔に、

仁王經ニ末世ノ佛法ヲバ、國王大臣ニ附屬ストトキタマヘリ、サレバ國王大臣ノ守護ニヨリテヒロマルベシ（中略）ナンゾ王法ヲソムクベキヤ。

といふ如く、佛法は王法によつて弘まるを以てゞある。こゝに蓮如のいふ道德生活は、王法尊重に始まるといふべきである。これ明かに漸く激しくならんとする下剋上の風潮の强き否定である。

こゝに於て次に考ふべきものに、日常生活の三大要素たる衣食住に關する蓮如の教說がある。御一代記聞書に

前々住上人（蓮如）仰ラレ候、家ヲツクリ候トモ、ツブリダニヌレザレバ、何トモカトモツクルベシ、萬事過分ナルコトヲ御キラヒ候、衣裳等ニイタルマデモ、ヨキモノキント思ハアサマシキ事ナリ、冥加ヲ存ジ、タヾ佛法ヲ心ニカケヨト仰ラレ候。

とあつて、衣服・住居に關して過分を愼み、冥加を存ずべきを敎へてゐる。また「衣食住ノミツハ、マタオノレ

〳〵ノムマレツキタルコトナリ」と述べて、衣食住の三者は、生來定まれるものにして全くの定業なりとし、從て己が分齊に隨ひ、過分の願を止むる所以である（眞宗教要鈔）その日常生活に關する規範として、定業と分齊との二つをいふてゐるのを知る。故に家は茅茸なりとも雨露さへ漏らず、食は蔬菜なりとも飢をさへ凌ぐを得、衣は麻布なりとも寒さをさへ防ぐを得れば事足れりとするのである。然らば實際問題として此の分相應の衣食住を如何にして得るか。その保障を與ふるものは、蓮如の所謂「御主」にして、そのいふところのものは、前述の如く彼が服從すべしと敎へた各人を支配する守護・探代・目代である。然し今の時勢に於てかゝる御主を得るは稀にして、幸ひに此の御主を得ることが出來た場合は　その御恩の深きを感謝し、よく〳〵これに仕ふべきをいうてゐる。（帖外御文）南無阿彌陀佛と唱ふる念佛は、彌陀にはや助けられたる忝き彌陀の御恩を報ずるために申すものなりとする報恩謝德の觀念は、移して現世に於けるよき御主への感謝の念へ將來されてゐるといへる。然しかゝるよき御主を得ない場合の問題がこゝに當然來るのである。これに觸れる前に、先づ蓮如の職業觀を一瞥する必要がある。

蓮如はその勸化に就いて、必ずしも出家發心、捨家棄欲の形式を重んぜず、一念發起の信心の定まる時、往生は決定なりといひ、從て商業に從事する者は商賣をしながら、奉公をする者は奉公をしながら、その姿を改めずして、不思議の願力を信ずべしと敎へてゐる。（帖外御文）更に「侍農工商之事」なる御文の一通にも、武士及び農工商に從事する者の濟度を說き、猶ほ進んで有名なる漁獵章御文には、漁業・狩獵等の賤業に從事する者をも、彌陀如來の本願にて救濟されるをいうてゐる。蓮如の布敎地が北陸・近江の如き山若しくは河海湖沼に接し、或は堺の如き商業都市に及び、殊にその敎化が當代一般諸宗の僧侶の心靈を得ないとして手を着けなかつた先にいふ賤業に從事する者にまで及んだことは注意すべきである。然しなほこゝに看過し得ざることは、「あきなひをするとも佛法の御用とこゝろえべき」（御一代記聞書）と商業が佛の信仰と何等矛盾なきを說きながらも、なほ前述の漁獵章御文

に、

タヾアキナヒヲモシ、奉公ヲモセヨ、獵スナドリヲモセヨ、カヽルアサマシキ罪業ニノミ朝夕マドヒヌル我等ゴトキノイタヅラモノ。

といひ、人々の從事する職業を正業視せず、更に眞宗教要鈔に、

身ノマヅシキモ過去ノ因果ナリ、サノミカセギイトナミテモ、イカメシキ德分ハナキモノナリ、ヲロカナルヒトハ、因果ノ理ニマヨヒテ、非分ノ利德ヲムサボルユヘニ、オモヒノホカノワザハヒモ出來スルナリ。

といふところの營利心の否定、日常生活に織込まれたる因果の思想に注意すべきである。徒然草や極樂寺殿消息にいふ如く、人は四十、五十に至れば宮仕、奉公を止めて專心に後生を願ふべしとまでは極言しないけれども、そこにはなほ經濟活動は彌陀如來によつて積極的には認められず、經濟生活に於ける努力なるものも認められずして、佛教的因果の法則の强調されてゐるを見るのである。

かくの如く蓮如の教說に見らるゝ社會觀、經濟觀には定業、因果の觀念が濃厚にして、各人をしてその現在に滿足せしめ、その分に安んぜしめんとしたものであるを知る。次に此に對する一般民衆の態度が如何なりしかを見なければならぬ。

四

戰國亂離のいつ靜謐になるとも見えず、諸國往來も容易ならず、佛法世法につけても迷惑千萬にして、靈佛靈社の參詣人もない。かゝる末法濁亂の世とはいひながら不思議にも阿彌陀如來の他力本願のみは盛んであると蓮如自らいうてゐる。(御文)かゝる眞宗の興隆は彼の人格の力と共に、その教說に當時民衆の心理に直接的共鳴を得たものがあつたためではあるが、また當時民衆が生活及び生命の常に脅かされ勝ちにして、宗教によつて精神の安居を見出さんとする切實なる欲求の存したことも考へられる。甘露寺親長が、亂離の上に偶〻霖雨に苦しめられつゝある民衆の愁狀を見て「世上無改德之沙汰不叶天意歟、當時者只往生極樂之望外無他世間也」(親長卿記文明三年閏八

月二日の條）との厭世觀が、必ずやその苦しみつゝある民衆の中にも存したであらうことは想像に難くない。此の人々をして眞摯なる彌陀信仰へ向はしめたことも考へられる。

併しながらさしも蓮如の期待し、また門徒も群集した吉崎を早くも三年にして文明五年藤島の超勝寺へ行つた理由として、

本望ノ如ク面々各々ノ信心モ堅固ナラバ、ソレヲ慰ミト思フベキニ、ソノ信心ノカタハシカ〳〵トモ無キ間（中略）イタヅラニ日月ヲ送リナンドスル條マコトニ本意ニアラズ（帖外御文）

と述べ、事毎に自己の心を裏切るをいうてゐる。そこに我々は蓮如の思想とその時代とを考へ、民衆の姿を明かに見得るのではあるまいか。

蓮如はその布教に際して、信者に對し講とか組とかの結社を起し、互に胸襟を開いて談合せしめ、和衷共同の必要を力説したが、それは佛恩を謝し、深甚の罪過を悔ひ、自身の往生極樂の信心獲得のためであるとしてゐる。然し此の會合が彼の期待に反して、世間の雜談に耽り、酒食を喜び、以て農業の辛苦を慰藉し、唯一日の閑を消すに過ぎなかつた。此の眞諦を從とした會合、或は講・組の結合體が、物質的利害によつて成立し、困難なる時勢に處して行く上に、非常に鞏固なるものとなつたのも當然にして、それが時に野心ある僧徒或は土豪に率ゐられて、信仰を表面にし、守護地頭・社寺の所領を横領すべく運動を起した。それが一向一揆である。然しそれにはなほ考ふべきものがある。

前述の會合の或ものには、座衆とてその座上にあがつて、杯なども人より先に飲み、座中の人にも亦その他の人々にも、いみじく思はれし者の存せしをいうてゐる。（御文）それは平民的なるべき會合に於て、人々に特に畏敬せらるべき人の存在をいうてゐる。

次に坊主と門徒との關係に就いても考ふべきものがある。世に多く信心の人と稱せられてゐる者は、唯坊主へ細々と音信を申し、又物をまゐらせて念佛を申す門徒をいうてゐる。その兩者の關係は「カノ仁ハ、ワレラガタ

メニハ、一ノチカラノ同朋ニテサブラフアヒダ、萬一他門徒ヘユキサブラハヾ、チカラヲウシナフベクサブラフ」（拾帖御文）との強い物質的基礎に立つものである。此の兩者の關係を「往生ノウレシサノアマリニハ、師匠坊主ノ在所ヘモ、アユミヲハコビ、コヽロザシヲイタスベキナリ」（御文）とする蓮如にしてなほこれを諸書に極力排斥してゐるを見れば、此の關係が全くの世俗的關係に墮してゐたことを證すべきものである。それは信心一致の上は四海皆兄弟との思想よりは、遠く相距るものといふべきである。此のところには知識歸命の思想を見ることが出來る。それは坊主に物をさへ多く參らせば、我が力協はずとも坊主の力にて助かるべきやうに思ひ、或は縱令彌陀に歸命するとも、善知識ばかりを賴むべきであるとする思想がある。（御文）此の思想は眞宗の各派卽ち專修寺・佛光寺・錦織寺等に於て盛んであつた。一例を擧ぐれば、專修寺派の一向歸西鈔に「世々ノ先德タチヲ生身ノ如來トアガメタテマツリテ、ワガミノチカラノタエンニシタガヒテ、報恩謝德ノコヽロザシヲヌキイヅベキナリ（中略）知識ノ恩德ハシカシナガラ彌陀如來ノ大悲ニオナジカルベシ」といふのもこれである。此の思想は蓮如の敎團內にも、彼の排斥せしにも關らずその信者は多かつた。かくの如き思想が、亂離の世救濟さるゝなく全く歸趨を失へる一般民の思想としてあるを考へる時、それは特殊の意義を有つて來ると考へられる。その善知識歸命は、阿彌陀を信じ淨土に往生せんとするよりは、現世に淨土を將來せんと願ふものである。

こゝに室町時代を通じて多く行はれたる私年號を顧るべきものがある。私年號は民間に於て私に制したるものにして、そこには民衆の心意を聞くことが出來るものではないかと思ふ。當時用ゐられたものとして、天靖（嘉吉三年）、福德（文正元年、延德二年及三年）、彌勒（永正三年及四年）、永喜（大永六年）、寶壽（天文十九年及二十年）の五を擧げ得るが、此等の言葉の持つ意義を亂世に於けるものとして考へる時、興味深きものを覺えしめる。彌勒に就いて見ても、彌勒下生經に、彌勒出世の狀況に就いて、盜賊惡人なく、聚落凡て戶を閉ぢず、水火刀兵饑饉毒害の難なしとあるが、此のものゝ私

年號として來るところには、彌勒出世の平和なる三會の曉を仰望せる窮乏の底に喘ぐ民衆の姿を看取することが出來る。その他のものについても同樣の事がいはれる。

當時の民衆が以上の如き思想を有してゐたことは、蓮如が日常生活に於ける定業、因果の觀念を說き、その身の分際に安んじ、領主への從順を敎へしにも關らず、その生活の不安に堪へ得ず、全くこれを裏切り、一向一揆の勃發に至つた一大原因であると思ふ。長享二年加賀の守護富樫政親の滅亡後、本願寺僧侶と土民との政敎混同の加賀の政治を、越前の門徒が羨望して「武家を地頭にして手ごわき仕置にあはんよりは、一向坊主を領主にして我まゝをいひてあひしらはん事土民のためには一だんよき國守なり」(總見記)とのそのことは、一向一揆に於ける土民の目的の那邊に在りしかをよく物語つてゐる。かゝる形勢こそ早くも流石の蓮如をも動かして「於佛法捨一命可合戰」(帖外御文)といひ、また圓如をして「佛法のためには身命をもおしむべからず、いはんや財寶哉」(石川河北兩郡中への消息)といはしむるに至つたのである。而して一揆の勢をして激烈ならしめたものに、土民が蓮如に敎へられたる報恩謝德の觀念が考へられる。彼の親鸞の忌日を記念したる十一月廿一日より七晝夜行はれた報恩講が、如何ばかり門徒の血を湧かせたものなりしかは蓮如の著作の隨處に見られ、それは實に當時に於ける眞宗敎團の生命をなすものであつた。蓮如のいふ如く、南無阿彌陀佛と唱へる念佛は、彌陀にはや助けられた忝い彌陀の御恩を報ずるために申すものとする報恩謝德の觀念は、殉敎の精神、奉仕の精神へと發展する。かゝる精神は前述の如きよき御主卽ち民治宜しきを得る領主として、土民の見出したる一向坊主に對しても働きかけるのは當然にして、此のことが一揆を熱病的激烈たらしめたものである。然し土民の一向坊主を奉ずるは、據て以て自己の生存の安全を期し得るとするが故にして、それが唯壓迫のみを事とする封建領主化することはその望むところではない前述の如くさしも加賀の政治を羨望した越前の門徒がその目的を遂行した後に、遂に「坊主達ヘハ後生ヲコソハ賴タレ、如下部荷ヲ持セ鎧ヲカタケサセ、被召使一向不

得心ノ事也」（朝倉始末記三十八）と敢然反抗するに至つたことを注意すべきである。卽ち土民には確乎たる信念或は主義主張の存せず、唯自衞上より出でたる行動なるを知るのである。

文明十二年十一月山科本願寺に於ける御影堂を建立せし時、一般民が、「抑、一亂以後世上ナントナルベキト各〻思量スルトコロニ、コノ靈地ニ伽藍ヲ建立シテ御影聖人ヲマノアタリ拜シ奉ル事、一宗ノ大慶」（蓮如上人遺德記）と驚喜せしそのことには單に伽藍の建立のみをいふのでなく、なほ彼等の殉教奉仕の努力が報いられ、こゝにその現實生活の平和幸福の將來されたるの喜悅を窺ふべきである。その後此の地は發展して有名なる天文法華の亂に燒失せし時は、四五代の富貴により廣大にして莊嚴なること佛國の如く、その在家また洛中に異らず隨分の美麗を極めたといはれてゐる。（二水記天文元年八月廿四日の條）然し本願寺自體より見れば、此の伽藍建立とその勢力增大とには、既に民衆精神の薄れ行くを見るのである。法然が「あとを一廟にしむれば遺法あまねからず（中略）念佛の興行、愚老一期の勸化なり、されば念佛を修せんところは貴賤を論ぜず海人漁人が苫屋までもみなこれ予が遺跡なるべし」（法然上人行狀圖）といひ、或は親鸞が僅かに集會するための道場のみを有し、民家と區別するために少し小棟を高くするに過ぎなかつた（口傳鈔）とする民衆的精神とは相距らんとし、また蓮如自身此の山科本願寺建立を勸めたる金森の善從に對して「われ一處不住にして生涯を果すべしと思なり」（蓮如上人遺德記）と一時それを辭退せしといふ祖師以來の傳統的精神と相反するものといふべきである。その僧侶と門徒との關係も、信心一致の上は四海皆兄弟とする親鸞或は蓮如の敎說とは大なる徑庭あるものを發展し行つたのである。遂にそれらは發展して、本願寺は一個の封建領主たるの觀を呈するに至つたのである。

五

かくの如く見來れば、蓮如は社會的活動をなせしとはいへ、社會改革論者ではなく、唯現在の社會制度を是認しつゝ、歸趨を失へる一般民の救濟を目指したものである。その人心を吸收し、無碍の辯才を有し、無比の精力

家じあつた彼自身の性格も何程か影響して、教化の實を擧げ得たけれども、長き亂離の世の民衆の生活意欲には異常に旺盛なるものあるを思ふのであり、また漸く激烈となつた下剋上の風潮と相俟つて、蓮如の教義に安んずるを得ずして、充分に意識せられない形に於てゞはあるが、社會の改革、生活の改善が主張されるに至つた。蓮如自身よりすれば、その教化傳道に於て所期の結果を得ず、却つて制止し得ずして渦中に入れられた一向一揆の展開が、遂に後世の確乎たる本願寺の基礎附けをなすものとなつたのである。換言すれば本願寺の基礎成立には當時の民衆の無方針なる自衛運動がその大なる一つの役目をなしたを思ふのである。眞宗懷古鈔に、

本願寺ヲ三ケ國（加〇能越）ノ大將ト仰ゲリ、御本山ヨリ云ヒ付ケ給フニモアラズ、又此三ケ國ヲ領地ニシタマフベキノゾミニモナカリシコトナレドモ、自然トカクノ如クナリ給ヒ云々

とあるを此の意味に於て肯定し得る。かゝる見地よりすれば、蓮如の足跡たるや餘りに過大視されてはならない。その過大視することは、傳道者としての蓮如を見失ふものであると思ふのである。

他方當時の民衆の運動を顧る時、その根强さに乏しいものあるは何に起因するか。それは前述の如く無定見にして、その目的の充分に意識せられざるのみならず、その困難なる現實を自力でなく、常に他力にて打開せんとせし點に歸し得られる。かゝる民衆の封建制度的精神は當時の新興勢力たる商工民の座を組織して生活の維持、進んではその勢力伸張に寺社權門勢家を本所と仰ぐ商工業の形態にもその基礎をなすものである。而してその民衆の寺社權門勢家と結ばんとするの紐帶には、宗教的信仰或は情義觀念は薄らぎ、唯單なる功利觀念を以てせるは注意すべきである。

更に民衆の此の他力本願は、自己の生活に對する充分なる意識、反省を缺き、瞬間的歡樂を追ひ、唯その日の無事を願ふのみに終らしめるに至つたことも考へられる。彼等の心と生活とを謠つた閑吟集を繙く時、生活苦に對する呪詛の聲の餘りに低いのに驚く。「何ともなやなう

〳〵、うき世は風波の一葉よ」といひ、「何せうぞくすんで、一期は夢よ、たゞ狂へ」といふ無反省、無自覺の態度が一篇を覆つてゐるのを見る。

六

先に述べし如く一般氏の蓮如の教說に充分安住し得なかつたが、その由來するところには、當時宗教の惑信時代の神祕的信仰の世界を去つて、飽く迄も現實の人間生活に立ち返らんとする一般風潮に注意すべきものがある。その風潮とは換言すれば來世的なものより現世的なものへ、唯心的より唯物的へ轉換せんとするものである。

既に何人も注意せし如く、足利義滿の管領斯波義將の竹馬抄に、

たとひ一度のつとめをせず、一度の社參をばせずとも心正直に慈悲あらん人を、神も佛もをろかには見そなはしたまはじ。

といひ、その道德に協へば必ず神佛の冥助ありとする考へ方には、信仰なるものゝ餘程自由になり來つてゐることが分る。義政の晩年に於て、諸社の祭禮一向その沙汰に及ばず、元日の節會等の公事また行はず、神社佛閣の爲體、嗟嘆すべきであると中御門宣胤がいうてゐるが、その來るところは唯單なる財政難よりのみでなく、宗教信仰の冷却し來れるを語るものである。蓮如が勤勞の德を稱讃して「佛法ノタメト思召候ヘバ、ナニタル御辛勞ヲモ御辛勞トハ思召サレヌ」といひ、或は商賣と佛の信仰との矛盾せざるを述べて「縱ヒアキナイヲスルトモ佛法ノ御用トコヽロエベキ」（共に御一代記聞書）といふところは、かくの如き時代の傾向とは相容れ難きものといはねばならぬ。かゝる傾向は同時に唯物的なる意識を伴ひ來るものにして、それは時代の經過と共に强くなりまさつたのである。その徹底するところは、中世の宗教的價値を全然否定し、現世の實生活建設に汲々たるに至るのである。有名なる秀吉の愛顧を受けた博多の豪商島井宗室の遺誡に於て、「後生たてにて日を暮し、夜を明し家を打捨て寺詣り、こんたもとを頸に掛け面目に仕候事一段見苦く候」といひ、また「先今生にては今生の外聞失はぬ分別第一に候」といふところには、明かに强き宗教の否定がある。

此の宗教を全く不必要とするの思想は近世に入つて愈〻發展して行つたのである。

七

蓮如はその布教に於ては、所期の目的を充分に果すを得なかつたけれども、遂に本願寺の基礎を確立するに至つた。而もそれは一般民衆の單なる自衛、充分に意識せられざる無定見なる生活改革運動の渦中に於て自然になされたと見るべく、從つて蓮如以後の本願寺に教理の上に新しき發展を持來さなかつた。他方民衆の運動も、その餘りに無方針なる他力主義のために遂に新しき發展を見るに至らなかつたとすべきである。然し商工業者のみはその境遇を宿命と觀じつゝも、壓抑を忍びつつ一歩々々と經濟的地歩を贏ち得て、近世に於ける發展への道を開きつゝあつたのである。歴史上の下剋上なる思想が、公家に代る武家、武家に代る町人として見られるならばそこには經濟的勢力の消長が一大基因をなすものであるが、その點よりのみ論ずれば、農民は永久に虐げらるゝ者であつた。（完）